旧商家の蘇生で町の活性化

滋賀・高島町
びれっじ

滋賀県高島町は江戸時代、大溝藩の城下町として発展した町である。町にはかつての繁栄を偲ばせる商家が今も数多く残されているが、言うに及ばずその多くは老朽化が進んでいる。

「ガリバーアクティブ'95委員会」（代表・今西仁さん）は、城下町としてのたたずまいを損なうことなく、そうした解体寸前の旧商家を町の物産販売所や染色工房に蘇生させ、町の活性化の拠点として機能させている。

平成八年四月にオープンした「びれっじ一号館」は油屋を営んでいた古い商家を借り受け、メンバーが休日を返上して改修したものだ。

母屋は「びれっじたかしま館」となり、高島町の物産品を展示、販売している。町の総合観光案内所も兼ねている。納屋は「アイルランド館」にした。高島町がアイルランドと友好関係にあることから、国際交流で生まれた文化を紹介する施設、アイルランドの特産品も展示、販売されている。

土蔵は「アイリッシュパブ」に改修され、黒ビールやウイスキーなどアイルランドのお酒が楽しめる。離れは「シャムロック・カフェ」というカフェ

レストランで、アイルランド料理やデザートを味あうことができる。

庭はラベンダー、ゼラニュウム、ミントなどが咲き誇るハーブガーデンに設えた。

平成十年四月にオープンした「びれっじ二号館」は、一号館の取り組みに刺激を受けた若者たちが、醤油の醸造元だった町内でもっとも古い商家を借り受け、できるだけ築後二百年の建築をそのまま生かし改修した。

「びれっじ二号館」には染色工房と味工房が入っている。染色工房は、地元在住の京都伝統工芸士が、より多くの人たちに染色の楽しさを手軽に体験してもらおうと開いている工房で、約一〇分間で墨流し染色によるハンカチづくりが体験できる。

味工房は、夜は居酒屋になる。

こうした空き家を活用した取り組みは地域住民に広がり、「びれっじ三号館」「びれっじ四号館」として増えていった。

三号館、四号館ともに女性が運営している。三号館は、障害者の施設で作られた作品が展示、販売され、八人のボランティアが手伝っている。

四号館はキャンドル工房で、びれっ

じ一号館のハーブガーデンを通り抜けた奥にある。世界各地で収集した色とりどりのキャンドルが展示されており、手づくりキャンドルの体験もできる。

それぞれの「びれっじ」は独立採算制がとられており、お互いに競争ができるようにと二つの運営委員会で運営されている。

活動を始めて五年になるが、三年目が一番苦しかったという。イベントの連発でどうにか乗りきったものの、今なお台所事情は苦しい。

それでも、びれっじが雑誌やテレビ番組で取り上げられるに従い、京阪神や名古屋からの観光客も増えてきた。城下町気質で、やや閉鎖的なところのある住民にも、年間三万人の観光客が訪れることでいい刺激となり、積極的になってきた。町の歴史を案内する観光ボランティアが結成され、活躍している。

こうして高島町では、解体寸前の旧商家は生まれ変わり、今ではすっかり町の活性化の拠点となり、城下町の散策や観光のキーポイントとして機能している。

■連絡先＝高島町商工会
TEL〇七四〇―三六―〇一八五